【奨励賞】

団体名	津山市内県立４高校における四校連携講座「地域創生学」
活動の内容（概要）	基調講演受講後フィールドワークと取材を行い、地域の魅力・課題を発見し、その課題解決に向け、自分たちにできることを含めた提言を作成する。一般に向けたプレゼンテーションと市長への手交・意見交換を行うことにより、社会参画意識を醸成するとともに、学校を中心として地域社会や経済団体、企業をつなぐ取組を行っている。

受賞理由

○　県立高校同士や、高校と行政、地域が連携を図り、高校生に身に付けさせたい力を共有した上で、夏休みの集中講座として４校が同時にカリキュラムに位置付け、政策提言まで導くプロセスは、まさにこれからの社会に開かれた教育課程に必要な学びを盛り込んでいるのではないか。

○　生徒の体験的で深い学びが次世代の担い手としての意識につながる。

○　行政、地域、大学、高校とのネットワークが、今後持続可能な事業として根付いていくことに期待がもてる。

○　市の課題に対する提言をまとめて市長に提出し、実践可能なものは市政に取り入れている点など、生徒のキャリア教育であると同時に地域活性化に繋がる活動となっている。

○　キャリア教育のカテゴリーを４校同時で行う等の先駆的な取組であり、発展性や可能性が感じられる。高校の枠を取り除き、近隣の高校が１つのキャリア教育を展開するというモデルになる。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

岡山県立津山東高等学校・岡山県立津山高等学校・岡山県立津山商業高等学校・岡山県立津山工業高等学校・津山市教育委員会・岡山大学・美作大学

【行政や地域・社会、産業界等】

津山市役所（みらいビジョン・移住定住・産業支援センター・観光協会）

RE-discoverTsuyama，　みんなの集落研究所、津山商工会議所

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成２９年～　【継続年数】３年

平成２７年度に津山市内県立高校４校と県教育委員会で、４校の生徒がそれぞれの学校で学んだことを生かし、協働して地域で学ぶキャリア教育の一環としての教科・科目「四校連携講座　地域創生学」を計画。平成２８年度に準備委員会を発足。平成２９年度から夏季休業中の集中講座（１単位）として実施。当初は１校５名を定員とし、高校生の視点で地域の活性化を題材に課題発見解決型のプログラムを実施した。キャリア教育の観点からの『生徒に身に付けさせたい力』を津山市役所や地域で活動する多くの方々と共有し、賛同や協力を得ることができた。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

津山市役所から初日に津山市の現状、重点課題を話してもらい、地域課題の発見をサポートしていただいている。行政および地域としては高校卒業とともに地域から人口が流出する「18 歳の崖」の克服が喫緊の課題であり、その対策を高校生自身にも考えてもらいたいと考えている。学校としては地域を知ること、地域を題材に課題解決探究のプロセスを実践することができる。地域をフィールドとして魅力や課題を発見し、様々な視点から物事を考える力、正解のない課題に対して協働して取り組む姿勢を育成したい学校と目的は共有できている。さらに高校生目線で作成した提言をヒントに津山市役所もいくつか政策に取り入れている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

津山市内県立高校４校が協力し、学校設定教科・科目として毎年開講しており、今年度３年目を迎える。年度ごとにより探究的な内容になるようブラッシュアップし、PDCA サイクルが機能している。平成 30 年度から、より探究的になるよう提言作成、津山市長へ提出することを目標にし、令和元年度にはさらにその提言内容が他人事でなく「ジブンゴト」となるよう工夫している。

事務局は４校で輪番制をとっている。教員の転勤等で継続性や講座の質が低下されるのを避けるため、大学教授、市役所職員、地域コーディネーターに早い段階で関わってもらいながら、４校の地域連携担当者が中心となり、話し合いを重ねながら企画している。その年度の取組が終了した段階で次年度へ向けて修正し、原案を作成する。講師・訪問先も年度内にアポをとり、新年度に新たな担当者が外部に依頼するという、持続可能なシステムもできあがっている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

＜地元産業、施設見学等のフィールドワークを行っている様子。＞

学校としては、フィールドワークを通して、生徒たちが自分の目で地域の魅力および課題を発見するといった、生きた社会体験を実践することができる。提言を作成するにあたっては必ず、高校生の私たちには何ができるのかを考えさせることにより、ジブンゴトと捉えさせている。また地域の大人たちと課題について語り合うことで、受講生のコミュニケーション能力は格段に上がり、普段の授業および課外活動にも効果が現れてきている。さらに高校在学中にこの講座を受講することが地域を知るきっかけとなっており、参加した生徒の意識は大きく変わっている。津山市には何もないと思っていたが、実は多くの魅力がある街であったという実感を持って、進学・就職していく。５年後、１０年後に彼らが地域に戻り、地域の中心的人材となる可能性を考えたとき、地域を題材にしたキャリア教育を展開することの意義は地域にとっても大きい。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

＜津山市長へ提言書を提出している様子。この後市長と意見交換を実施。＞

津山市に対する提言を作成し、高校生ができることを考え、市役所の関係部署および津山市長に提出し、意見交換を行い、その中から実践可能なものについて、市政に取り入れてもらっている。教育課程が異なる学校の生徒との交流を通して、価値観の違いを許容できるようになり、意見を選択するのではなく、融合させていくことの楽しさを実感している。また、この講座をきっかけに各団体と高校生の意見交換を実施することで、生

徒の社会参画を促し、それが周囲の高校生にも波及している。具体的には、「津山圏域企業ガイド」の作成に関わったり、商店街の活性化を図るイベント「うまいもん番街ｉｎソシオ商店街」を企画・運営している。なお、このことについては、受講生に留まらず、受講生以外の生徒も数多く参加するなど、地域の学校に広がりを見せている。高校側の四校連携事務局が中心となり、各団体と互いの要望を調整しながら折衝し、学校、地域にとって良い方向性になるよう話し合いながら進めている。趣旨に賛同し、協力してくれる団体や部署は多く、その方向性、すなわちベクトル合わせをしている。ただ、あくまでも生徒にとって教育効果があるかという基準で連携を進めるように気を付けている。

学校現場の評価・感想・コメント

生徒の事前事後のアンケート集計結果では、明らかに津山地域についての意識変化が見られる。地域に何も魅力がないと思っていたが、知らなかっただけであり、自分たちはもっと知り、周囲にその魅力を知らせていかなければならないという変容が見られる。世の中（地域）を知って大学進学、就職させることができる取組となっている。

今後、各学校で地域学が浸透していくに従い、連携・受入をする地域側としても各校から個々に依頼を受けるより、自治体圏域の学校同士が連携し、調整することでさらに効果的、建設的な地域連携になるのではないかと考える。また、自治体が大きくなるほど、学校同士の連携をする必要がある。

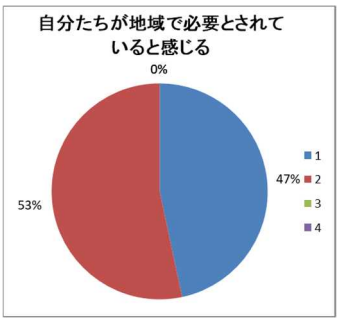
関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

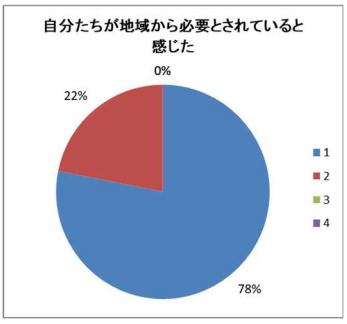
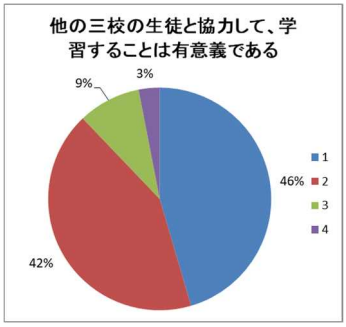
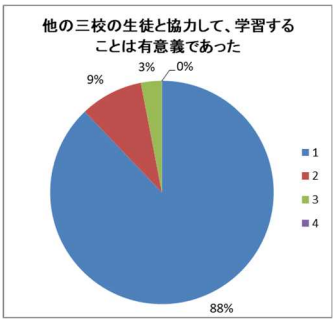
このような企画があること自体が地域活性化であると思う。高校生が地域について学び、地域の魅力、課題を知って社会に出て行くことは大変重要であり、地域の良さを知らずに外部に出て行くのとでは大きな違いが生じる。速効性は低いが、アンケート結果からも高校生の意識変化がわかるので、継続的に取り組んで欲しい。また、高校生が地域で活動することで街全体に活気が溢れ、大人も元気になる。

＜受講生アンケート事前・事後比較（一部）＞

①あてはまる　②どちらかといえばあてはまる　③どちらかといえばあてはまらない　④あてはまらない

地域課題解決・魅力発信のジブンゴト化





他校生との交流の意義